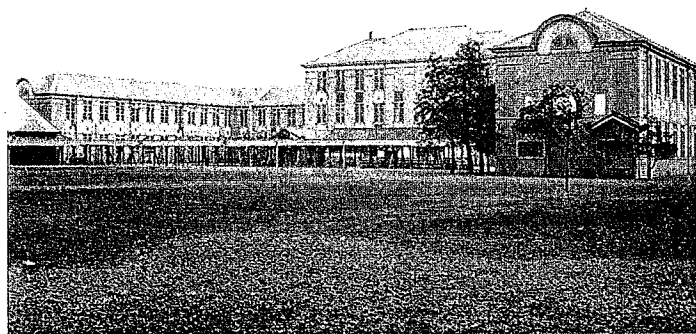
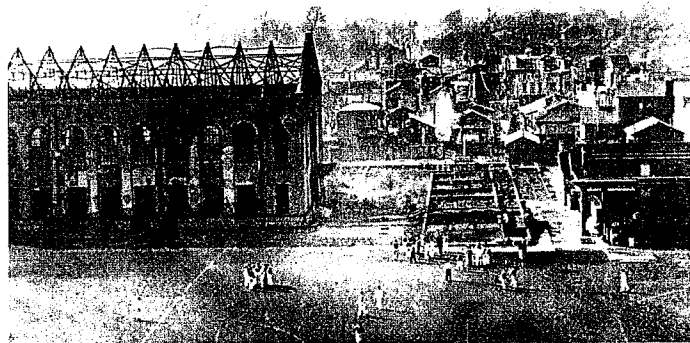


●紫友同窓会(府立五中、都立小石川高校および都立小石川中等教育学校)

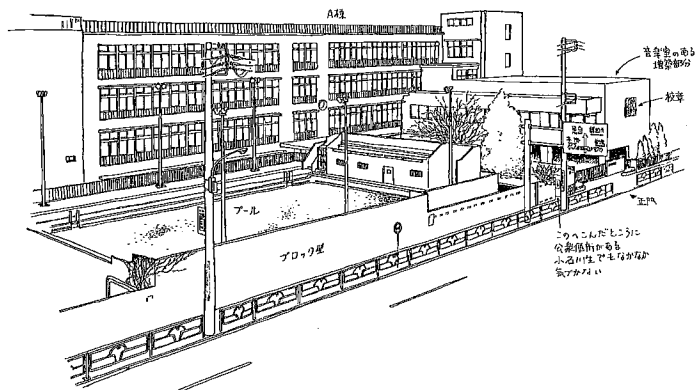
〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-29-29 東京都立小石川中等教育学校内 TEL FAX : 03-3945-1961



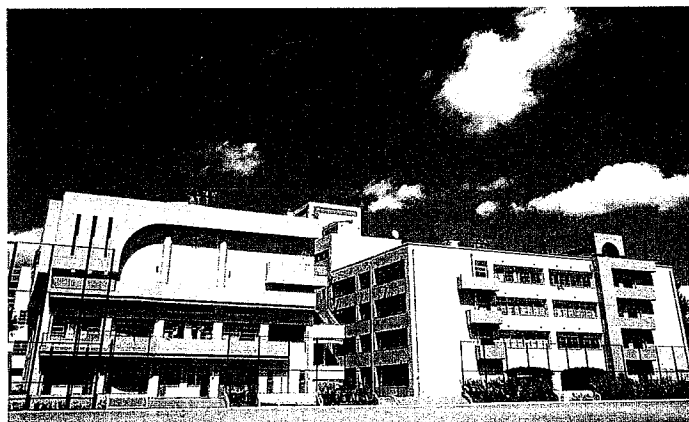
大正 10 年ごろ



昭和 22 ~ 23 年ごろ (焼け落ちた講堂)



昭和 62 年ごろ (039J 久光一誠画)



現校舎

CONTENTS

目次

03	会長挨拶	石川忠男(015A)
04	校長挨拶	奈良本俊夫
05	副校長挨拶	堀江敏彦・土方賢作
06	特集① 百周年事業 本格的に始動	
08	特集② あれから70年	風巻義孝(五中23D)
17	先生お元気ですか?	
	市毛勝雄先生・竹内誠吉先生	
19	同窓生訪問	櫻井孝次さん(07F)
23	吾が校友の精神を	

	①小石川を遡る	小原誠(03A)
	②紫友美術会と大勝恵一郎先生	清水洋三(03F)
	③校訓を背骨に新たなる創造へ	林香君(024A)
	④粕谷一希さんのご逝去を悼みながら	寺門克(06G)
	⑤根本二郎さんを悼んで	俵一雄(018E)
	⑥栄久庵憲司さんをしのんで	柴田知彦(017D)
30	今、学校では	
	今、小石川では	中野靖子(038G)
	PTA行事報告	栗山貝也(PTA会長)
34	旧職員日より	

36	生徒表彰・行事週間
37	転出転入者名簿・大学合格者数
38	平成27年度評議委員会報告
40	部会報告
44	会計報告(決算・予算)
45	同窓会より 百周年・紫友芸能祭
48	同期会・クラス会
52	クラブOB会
57	地域同窓会
60	事務局便り
62	逝去者一覧
63	編集後記

3. 勤労働員の記録

勤労働員

1941（昭和16）年の開戦から45（昭和20）年の終戦まで、100年にもなろうという学校の歴史の中の僅か3年半程の期間の出来事であったとはいえ、当時の生徒達の日常にとって勤労働員は、学校生活としては思いもしなかった異常な体験であり、計り知れない重みをもっていたことですので、記憶を風化させず、記録に残しておかなければならないことでしょう。

時局の進展とともに勤労働員は、どの学年も次第に質量ともに強化されていくなかで、23回生は1945（昭和20）年3月に遂に史上唯一の4年での繰り上げ卒業までも強いられる一方、進学した学校の受け入れ体制が整わず数か月を、そのままの職場に通わされたという動員の記録を回顧してみます。

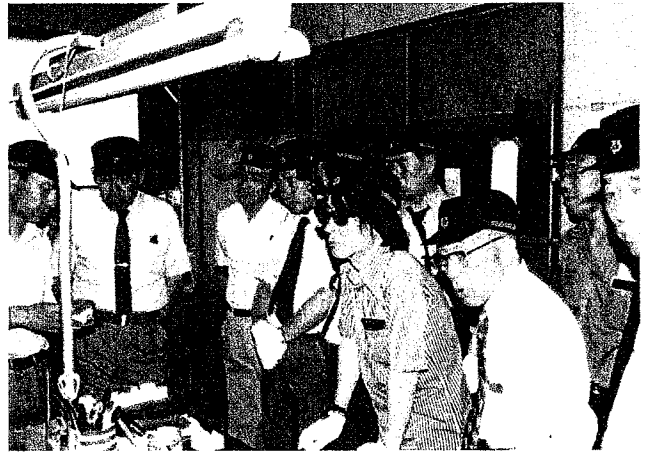
1年の学年末試験終了後の春休みは、まだ開戦後の戦線の拡大に酔いしれていた頃でしたが、「銃後」を引き締める意味もあったのでしょう、4～5日間でしたが、八丁堀の製本屋さんに、数人ずつ配属されて、新学期に間に合わせる教科書の製本の仕事に従事しました。

2年生の時も夏休みに入る直前の、ほぼ1週間、差し迫った仕事があったようには思われませんでした。が、凸版印刷の志村工場に通いました。

3年生の時は、時期・日数は正確に記憶していませんが、炎天下、西丸町（現・千石4丁目）にあった航空計器部品工場周辺の強制疎開の後片付けを手伝い、3学期の授業はなく陸軍東京兵器補給廠（現・北区西が丘）に動員され搬出武器の梱包作業に従事しました。

戦局も厳しくなってきましたが、十条駅に集合しクラス毎に隊伍を組み、寒空のもと、かなりの距離を往復したことを覚えています。

4年生の1学期は学校に戻り授業がありましたが、7月には学期末試験も、そこそこの本格的な勤労働員が始まりました。前後の学年は、『立志・開拓・創作—一五中・小石川高の七十年—』1988の窪川健造（25回）さんや成田喜澄（教員）さ



んの寄稿にも記されている第一級の軍需工場の陸軍第一造兵廠にまともな動員されたと聞き及んでいるのに反して、われわれの学年は、何故かA組とB組は滝野川の大蔵省・印刷局へ、C組とD組は板橋の東京理科と大和合金に、E組は荒川の理研ゴムにと、場所だけでなく官民にわたる職場の性格、内容、規模、したがって動員対象となった学校～生徒の構成状況もまちまちなところに動員されました。

旧制都立五中35周年記念クラス会
生徒動員大和合金三芳工場見学記
フランス文学者 滝澤龍彦

今年の七月十一日は、私にとって感慨ぶかい日であった。私たち旧制都立五中（現小石川高）のクラスメートが、卒業三十五周年を記念して、かつて戦争末期に勤労働員で通っていた合金工場を見学したのである。

東上線の鶴瀬駅
前に十数人が参集
すると、マイクロバスが工場まで私たちを運んでくれた。医者もいれば会社員もいる。俳優もいれば教授もいるという私たちの一行である。工場では、社長をはじめ社員一同が笑顔で私たちを迎えてくれたのである。

（日）（記）（か）（ら） YGブロンズ

「落けた金属を溝と呼ぶ」が、陳述はいいが、旧知の社長は八十歳を迎えて、なお鋭意（かくしやく）たるもので、記憶力も盛く、まだ十六歳の少年だった私たちのことをよく覚えていた。私たちのことをよく覚えていた。私たちのことをよく覚えていた。

（落）（た）（け）（た）（金）（属）（を）（溝）（と）（呼）（ぶ）（が）、陳述はいいが、旧知の社長は八十歳を迎えて、なお鋭意（かくしやく）たるもので、記憶力も盛く、まだ十六歳の少年だった私たちのことをよく覚えていた。私たちのことをよく覚えていた。

（落）（た）（け）（た）（金）（属）（を）（溝）（と）（呼）（ぶ）（が）、陳述はいいが、旧知の社長は八十歳を迎えて、なお鋭意（かくしやく）たるもので、記憶力も盛く、まだ十六歳の少年だった私たちのことをよく覚えていた。私たちのことをよく覚えていた。

なつかしの生徒動員
大和合金見学記

（落）（た）（け）（た）（金）（属）（を）（溝）（と）（呼）（ぶ）（が）、陳述はいいが、旧知の社長は八十歳を迎えて、なお鋭意（かくしやく）たるもので、記憶力も盛く、まだ十六歳の少年だった私たちのことをよく覚えていた。私たちのことをよく覚えていた。

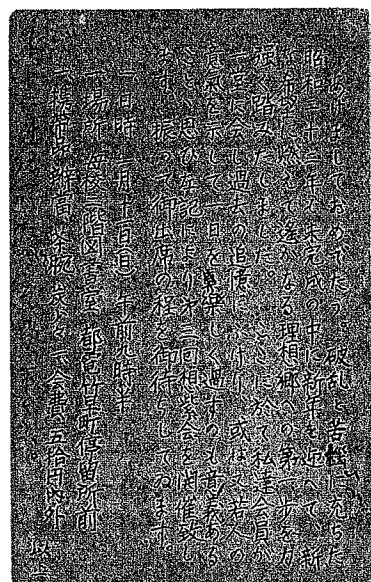
（落）（た）（け）（た）（金）（属）（を）（溝）（と）（呼）（ぶ）（が）、陳述はいいが、旧知の社長は八十歳を迎えて、なお鋭意（かくしやく）たるもので、記憶力も盛く、まだ十六歳の少年だった私たちのことをよく覚えていた。私たちのことをよく覚えていた。

五中23回D組 70年に及ぶ「想紫会」の歩み

「本8日未明…西太平洋において…戦闘状態に入れり」との早朝のニュースにより「開戦」を知る僅か数か月まえの昭和16年4月に入学、「終戦」の昭和20年、2度目の東京大空襲による校舎焼失のほんの半月前に、4年で繰上げ卒業となった五中時代唯一の学年が、われわれ23回生です。

23回D組の卒業後はじめてのクラス会が開催されたのは、翌・昭和21年の年明け早々、場所は五中の仮校舎・造兵廠の青年学校でした。名称は「想紫会」とし新年会として開くことを決め、後に時期は変更されましたが毎年欠かさずに開催してきました。また会誌の作成にも取り組み、1年次の担任・水高静憲先生の奥様・二三四様からの寄稿も戴いた手書き・ガリ版刷の『あおぎり』創刊号が、翌年の会に配布され、意気込みはあったものの続号の発行は実現しませんでした。手元にクラス随一の達筆・金原義典君が幹事で同心町校舎の図書室で開催された昭和23年の第3回「想紫会」の案内ハガキが残されています。携帯品として書かれた弁当、茶碗、炭少々、会費・五拾円内外……は時代を物語っています。

結核のために休職された水高先生に代わり2年次までの担任・斉藤市四郎先生、3～4年次の担任・小澤正男先生を毎回お招きし出席して戴いたうえに、昭和40年代には英語の池谷先生、教練の奥山先生、地理の成田先生にも、おいで戴いたことがありました。昭和55年、卒業35年を記念して企画された、勤労動員先の「大和合金」の戦後の後継工場を見学し、社長夫妻を交えた懇親会を行ない、参加者最大の記録を残しました。この年から、会は気候の良い季節に開催することになり、梅雨に入るまえの5月下旬から6月上旬となりました。



昭和50年代には数年前に他界した級友・木下龍雄君に代わり奥様が引き継いでおられた新橋・烏森の「山家や」を会場にしたことが数回、時代が平成に入り斉藤先生のご高齢を配慮して、お宅に近い浦和の駅前に会場を移した時期もありましたが、平成も二桁になった頃からNHK共済会・青山荘に会場を固定し、遠隔地からの参加を考慮し、夕刻の開会から昼の会合にと切り替えることにしました。

この間、平成6年発行の『紫友同窓会報』21号に記事と写真が掲載されているように笠尾博太郎君のはからいで作成された、応援旗サイズの紫紺のD組の旗が、毎回のクラス会の会場を彩ることが恒例となったこと、また前記の工場見学会をきっかけに、その後、何回となく臨席いただいていた「大和合金」の創業者・萩野茂様の、平成7年9月26日に挙行された社葬にあたり、忌わしい思い出となっている場合が少なくない勤労動員学徒と職場との関係としては異例の「弔辞」を献呈したことも特筆に値することでしょう。

お互いの高齢化に対応し5年程前から「想紫会」の持ち方を大きく変更しました、年1回の開催とはいえ案内状の発送と繰越金の管理などの責任を持つ幹事の仕事を廃止し、開催日は3月、6月、10月の第3木曜と会う機会は逆に増やし、会場を固定して電話による対応の枠に納めることにしました。齢80を越えて出席者は二桁を割り、参加者の減少に応じて開催日は減らさざるをえなくなりましたが、お互いの健康を気遣いながら戦時下の五中時代の様々な思い出にひたっています。

風巻義孝（五中23D）



昭和55年7月12日

旧制都立五中35周年記念クラス会

学徒動員大和合金三芳工場見学記

フ랑스ス文学者 澁澤龍彦

今年の七月十二日は、私にとって感慨ぶかい日であった。私たち旧制都立五中（現小石川高）のクラスメートが、卒業三十五周年を記念して、かつて戦争末期に勤労働員で通っていた合金工場を見学したのである。

東上線の鶴瀬駅

前に十数名が参集

すると、マイクロバスが工場まで私たちを運んでくれた。医者もいれば会社員もいる。俳優もいれば教授もいるという私たちの一行である。工場では、社長をはじめ社員一同が笑顔で私たちを迎えてく

（日）記

（か）ら

YGブロンズ

れた。むろん、三十五年前からの社員はいないが、旧知の社長は八十歳を迎えて、なお矍鑠（かくしやく）たるもので、記憶力も驚くほどよく、まだ十六歳の少年だった私たちのことをよくおぼえてい

（溶けた金属を湯と呼ぶ）が、傾けた容器からどろどろと流れ出てくる。空気ハンマーが地ひびきを立てて鑄塊をたたいている。私たちのころとは工程にずいぶん違った面もあるが、それでも私は三十五年ぶりに工場の

てくれたのである。

私たちは帽子をかぶり手袋をは

めて社員の案内で工場のなかを見学させてもらった。この工場では、YGブロンズという合金を造っているのである。真っ赤に溶けた湯

種の感慨に浸らないわけにはいかなかった。

申すまでもあるまいが、この工場は戦後になって再建されたのである。私たちが通っていた工場は、空襲ですっかり焼けてしまったのである。

五年ぶりに工場のふん囲気というものに接して、ある

ながしの学徒動員 大和合金見学記

萩野茂雄様

暑中お見舞申し上げます。

本格的な暑さの中で、毎日ご精励のことと存じます。

さて先日は、三十五年前の悪童連が、懐しい大和合金へ押しかけて、優しい社長はじめ、貴君ら幹部諸君のご多忙の最中を長時間にわたり、お邪魔したにも拘らず、大変に歓迎していただき厚く御礼を申し上げます。

また宴会についても、いろいろご高配を賜わり、ご散財させていただきましたことを恐縮に存じます。

当日の写真ができましたので、同封いたします。何卒、今后ともよろしくご交誼の程お願い申し上げます。

向暑の折柄、ご自愛下さい、取敢えず御礼まで。

敬具

會 彰一郎

